



12月のさろんテーマ

「フルーツ・ツーリズム」に学ぶ市民力の新しい形

野口智子（ゆとり研究所所長 NPO スローライフジャパン副理事長）

フルーツいっぱいの中での、お話

和歌山県紀の川市のフルーツ・ツーリズム。市民はどんなまちおこしを始めたのか。市民力の引き出し方のツボは何なのか？ 紀の川市から届いた柑橘類をいただきながら、仕掛け人の野口智子さんから協働のスローライフまちづくりの進め方を語っていただきます。

■スローライフはハートおこし。

まちおこしでも、行政はあれができないこれができないと規制しがち。住民は要求が多い。このすれ違いを自分のまちが好きだというハート、気持ちを原点に“協働”で地域おこしに取り組む。そのハートおこしです。

2013年、ふるさと財団の仕事で紀の川市に入ると、行政も住民も「このまちは、桃しかできない」「特色がないまち。何をしたらよいかわからない」という。でも桃以外にフルーツなら山ほど採れる。そこで、フルーツを核にしてフルーツ文化のまちにし、フルーツ・ツーリズムを考えてはどうかと提案しました。

■役所案を白紙撤回。

すると市役所は翌年にさっそくフルーツ・ツーリズムの3か年計画とそれを進める住民協議会の名簿を作ってきた。私は「ゼロから市民参加しなければ、協働のまちおこしにならない」と計画を白紙撤回させた。

役所もびっくりしたとは思いますが、やってくれた。広報・新聞で参加を呼びかけた。第1回



公募で100人が集まってワイワイ

ワークショップに学生さん、地元金融機関、桃農家のおかみさんなど100人もの市民が詰めかけ、そこで出たアイデアは500件。それを「すぐやること」「少し先にやること」「いつかやること」に分類し、とにかくすぐやりたいことにみんなが投票し、5つのチームに分かれて、即実行に移った。

実行しなければアイデアなんて意味ありませんから。取組んだのは「フルーツ川柳」「フ

ルーツ茶会」「農業体験」「フルーツ料理研究

「情報発信」。住民たちが真剣に知恵と力を出し合って、実現に取り組んだことで、市民の心に火がついた。



話題を集めるフルーツ寿司

たとえば、翌日地元のお寿司屋さんが独自に考案して、フルーツ寿司を始めた。フルーツと寿司ネタを組み合わせたものだけだがこれがおいしい。TV・新聞で取り上げられ、PR効果が大きかったです。

■アクションが波及。

今年は「カレンダー」「体験プログラム」「料理コンテスト」「商品開発」の4つのチームに分かれていろいろな活動が始まったうえ、当初予定していなかったファンクラブ、フェイスブック講座、コーディネイト講座、紀の川びるびるハウスといった具体的アクションがどんどん波及的に生まれた。

来年本番の「フルーツ博覧会」も、すでにプレ版をやった。また、市の名物料理として「桃パスタ」「イチジクカレー」も誕生し、喫茶店「野カフェ・おりや」までスタートした。

来年はフルーツ博覧会の本番です。紀の川市にお越しく下さい。面白いこと請け合います。

【意見交換】

Q 課題はなんですか。

A この事業は市の産業おこし・文化おこしだけでなく、フルーツ・ツーリズムで市を訪れてもら



プレフルーツ博覧会もこの賑わい

い、紀の川市に魅力を感じた人を移住・定住につなげることを目標にしています。その成果を上げるまで一過性に終わらずに、どのように続けられるか。それが課題です。(2015年12月15日開催)